

野外作業の手順



①草や木の枝などを取りはらい、調査区を掘れる状態にする。



②測量をして、掘る穴（トレンチ）を設定する。



③スコップ・ジョレンを使ってトレンチを掘る。出土した遺物は、トレンチ・層ごとにまとめて袋にいれる。



④トレンチの底をきれいにして、遺構（住居址など）の存在を確認する。



⑤遺構全体があらわれるように拡張する。



⑥遺構にはいりこんだ土を掘っていく。出土した遺物は1点ずつ番号をつけ、位置を図面にとる。



⑦床面まで掘り下げたら柱のあとなどをさがして掘っていく。



⑧手前は掘りあがった住居址。掘りおえたすべての遺構は、写真と図面で記録をのこす。



室内作業の手順

①はこびこまれた遺物（土器など）はまずていねいに洗われる。

②出土した地点・層を白のポスター・カラーで書きいれる。



③土器の文様は、拓本（さくほん）によって、記録がのこされる。

④バラバラに出土した土器には、同じ器体（きしん）のものがあるので、つなぎあわせ、ない部分は石こうでうめてもとの形に復元する。



⑤ディバイダーなどを使って正確に実測図をつくる

⑥実測図をインクでトレースする。



参考になる本

「石器と土器の話」 藤森栄一 (学生社)
 「図説 日本の歴史」 (集英社)
 「古代史発掘」 (講談社)
 「世界考古学事典」 (平凡社)
 「岩宿の発見」 相沢忠洋 (講談社文庫)
 「縄文土器をつくる」 後藤和民 (中公新書)

「縄文生活の再現」 楠本政助 (ちくまぶっくす25)
 「年表でみる日本の発掘・発見史」 (NHKブックス)
 「北総台地」 (りくえつ)
 「城」探訪ボックス (小学館)
 「房総の古城址めぐり」上・下 府馬 清 (有峰書店)



V 調査のまど

和良比遺跡掘りが始まって早くも三年たちました。最初の作業は昭和56年3月だったと思います。そのときの作業員は私たち農家の主婦20人程でした。荒れ果てた山や畑等をきれいにして2メートル×4メートルのわくを設定し、遺物が出ることを期待しながら掘り始めました。作業期間は1ヶ月位で終了しましたが、また56年度の秋より、二期作業が始まりました。応募者が増えて40~50人位、とにかく大勢になりました。この大勢の作業員を指導する監督さんは、大変だったのではないかと思います。57年度にはいと、本格的に調査が始まり、物珍しい遺物が色々出て、私たちが考えてもみなかったことが、目の前に実現されました。和良比遺跡事務所の中に、色々珍しい土器や、再現された昔をしのぼせる物が沢山きれいに並べてあります。和良比地区が何十年間の内に変って行く姿を淋しく思うでしょうが、でも皆さん、和良比遺跡の事務所にお出かけになって、ちょっとのぞいてみて下さることをお待ちしております。私たちもこの仕事が始まったお蔭で自分で働いて収入を得ることもでき、皆さんと友達になることもできました。本当に係の皆さん、監督さんありがとうございました。今後とも宜しくお願ひしたいと思っております。 真道美津

発掘調査の仕事をさせていただき2年近くになります。当初は何もわからず、発掘調査といえ仕事にコンプレックスを感じつつ、仲間の方々に教えられながらのきつい仕事でした。

初めて土器を見つけた時は、体の痛みも忘れるようなうれしさ。……しぜんにコンプレックスも消

え友だちにも堂々と言えるようになりました。この仕事をしたのは、時間の自由がきき、現場が近かったからです。別に興味があったわけでもないのにいつの間にか、テレビ等で、他の遺跡のニュースが目に入ると手を止めるようになり、自分ながら不思議に思います。 鈴木智恵子

和良比遺跡で仕事をするまでは、遺跡のことなどまったくと言っていい程わかりませんでした。この仕事をするようになって一年程たち、少しは遺跡のことがわかるようになり、房総風土記の丘や歴史博物館などに行っても楽しく見学できるようになりました。現在はいくらか興味も出て来ました。発掘作業をするようになってから「大昔の人はこんな生活をしてたんだなあ」と知ることができるようになりました。最初の頃はスコップが使えなかったのが苦勞しました。仕事に来ている人達も良い人ばかりで、仲良くやっています。外の仕事ですので夏は暑く冬は寒いですが、皆元気に働いていると思います。男の人でも何人かいます。木の根っこなどをとってくれるので、そのような時とても助かります。 千葉光子

発掘調査のバイトを始めてもう三年が過ぎた。始めたころは高校を卒業したばかりの自分もはや大学四年になろうとしている。自分にとり、このバイトを続けていちばんよかったと思うことは、近所付き合いというものを知ったことである。それまで、まったくと言ってよい程近所付き合いのなかった自分が、この仕事を通じて地区の人と知り合うことが出来た。また自分の子供じみた考えが変わり、ほんのちょっと成長したと思えるのもこの仕事を続けたからである。さて発掘調査がおもしろいと感じるようになったのは最近である。それまでは単なる確認調査でまったくおもしろ味

のないものであったが、最近、石器時代の確認に入り、しかも“大当り”の出土が続き、次々と石器が出土してくるようになると、まるで自分がシューリマンになったような気がする。シューリマンは幼い頃読んだトロイの木馬伝説から当時誰もその存在を認めなかったトロイの都を発見した人物だが、現在、実際に発掘作業に従事してみて、昔黙々と発掘を続けた彼の気持が理解できる。実際に一万年前は地表だったという面まで掘り下げてみると、まるでその時代に生きた古代人たちの息吹きを感じられるのである。眼を閉じればまるでその情景が浮かんでくるようだ。一万年前、今は住宅地のこの地に石器人が生き、生活をしていた……。考えただけでも歴史というものの重みを感じることが出来るではないか——そこで私は声を大にして言いたい。「発掘調査はおもしろい！」と……。

内田広幸

私が小学校の頃、今から14年くらい前のことですが、学校の授業で土器の破片などを拾って歩いた記憶があります。当時は和良比のお山もうっ蒼とした雑木林で、一人では歩けないような所でしたが、その近くの畑を耕した所とか、農道などで土器が割り合い簡単に見つかったのを覚えています。また、何千年も昔の物であることや、考古学の資料になることなどとは思っても探すことの楽しさだけでした。今では土器を見つけるのに、正確な穴を掘ってどこで出たかを明記したりします。これは意外と大変な仕事ですが、土器片などを見つけた時は、何か歴史的な発見をしたかのような感動があります。また、その出土した土器をつなぎ合わせて復元していると大変ですが喜びさえ感じます。土器で興味のあるところは、土器に描かれている文様です。しぜんに描かれた線、点、縄目文様など何をどうしたいと言うのではなく、

描くことへの欲求と、描くことへの必要性で描いていると思います。また、出土した土器をよく見ると文様を描いた人の感性や感触が、なんのわだかまりもなく伝わってきて、昔の人々の生活を想像させます。私の住んでいる四街道で、沢山の歴史を知る上での資料が発見され、研究されていることは、とても大切なことだと思います。昔の人の生活を知ること、開発や時間に追われている現代を、見なおすことが出来るかもしれません。

佐藤喜一郎

「サクッ、出た」この出土の瞬間が僕はたまらなく好きだ。それまでの疲れを忘れてしまう程うれしいのだ。そして更にまた発掘しようと精を出す。手に豆をつくりながら。反対にいくらやっても出土しないことがある。見過ごさないように、放りすてないようにと注視するのだが、出土しないのだ。ただ、あてどもなく土を掘る。ただ疲れるだけだ。僕は、こんな時がたまらなく嫌だ。

出土した遺物を手の上に乗せて、ふと考えることがある。「大昔の人はこんなものを使ってたのか、何のために作ったのかな、どんな家に住んでいたのかな」などと、とめどもなくひとり空想してみる。そして僕の想いは、遺物を越えてゆき、大昔の人々の人生観をもかいま見てしまう。僕はこんなひとときがたまらなく好きだ。僕はこんなひとときを大切にしたい。

石井秀樹

ぼくが初めて遺跡調査に参加したのは北風のふく2月の寒い日。まず、ぼくの目に飛び込んだのは、和良比の広大な土地とでっかい空だった。そして、このスケールにおどろきながら、冬色の大地を掘りはじめた。たちまち寒さは暑さに変わり、あせがにじむ。まわりを見ればみんなもあせで光っている。こうして掘っていると何万年も前の人

たちに会えるような気になる。そして当時の人々が生活をしてきた地点まで掘り下げ、自分がその地に立った時、何万年という偉大な月日の重量感を体で感じる。同時に、大きな仕事をひとつやり終えたという充実感が得られる。

やがて、この大地は宅地となり、家がたち並ぶだろう。しかし、何万年も昔に、すでに人々がこの大地で生活していたという事実は忘れてはほしくないと思う。 円城寺正志

「いとくん、今なにやってんの」久しぶりに会った友だちにこのように尋ねられると、このごろの僕は「今はねえ、早稲田大学第二文学部の学生をやっておるのだよおまえ」と答えるかわりに、ただ一言こう言っている「土方。」土方。ああ、なんと崇高な響きだろう。このテの作業をしていると、どんなに立派な肩書も、とても虚しいものに見える。

夏の炎天下。短パンいっちょで土を掘る。一万年前の大地に、忘れかけていた原始時代の汗が滴る。部屋の中では強力な存在感とともに出現するゴキブリにさえ、同じ生き物としての憐れを感じてしまう。ああ、我々の祖先たちが見ていた空と同じ青さを、僕たちの空は持っているのだろうか——とまあ、書きながら自己陶酔してしまうくらい崇高なのであった。

今の世の中、流行は年毎に変わり誰もが身の回りのことで手いっぱい、毎日の生活は分刻みだけれど、発掘調査にわずかながら関わっていると、時間を遡るにつれて時間のスケールがどんどん大きくなっていくという実感がなんとなく湧いて、しまうのだ。石器時代なんかには、何十、いやひょっとしたら何百世代もの間、似たような生活がくり返されていたんじゃないだろうか。——

そんな人類の祖先たちの「生きる意味」は、お

そらく「種の維持」ということにつきるだろう。そして僕の身体には、彼らから受け継いだ血が、確かに、流れている。

「そんなくだらないことでカリカリすんなよ。ほかにあるだろう、本気で怒んなきゃならないことが」まだ言葉なんか持ってなかったはずのご先祖さまのこんな呼びかけを感じるようになってしまったのも、土方のおかげなのだ。 伊藤伸久

四街道へ移転したばかりの私は、この地について知っていることは、何もなかったのである。それがあきつかけから、この発掘調査事務所です仕事をするようになった。

私の場合、主に事務所内で遺物や図面の整理をし、報告書の下準備をしている。ある時は、粉々に打ち砕かれた気の遠くなりそうな土器の破片を、数の定まらないジグソーパズルを解くがごとく、組み立てていく。何日もやっていると、目は充血し、焦点が定まらなくなる。それでもこれで良しと納得するまでは、途中放棄はできないのである。今、手にしているこの土器の破片が、何千年もの時を経て、復元されていく。故に、形になっていく感動は言葉では言い表わしがたい。

考古学とは無縁だった私が、毎日毎日呼吸をしているこの土地の過去に携わり、それを後世に残す仕事をしているのである。

何年か後には、この地は住宅街に変わり、あとかたもなく過去はかき消され、その歴史は報告書のみでしか知ることができないのであろう。

でも私は、将来生まれてくる自分の子に、生の声でこの地の歴史を語れるよう、今日も遺物に取り組んでいるのである。 西山昌子

和良比の台地はこんもりとした山であった。女性が一人で歩くなんて考えられない恐いお山で

あった。ところが今は、木は切り倒され、草は刈り取られ、お山は恐ろしいお山ではなくなった。

朝8時半、発掘の場所を目指して、おじさん、おばさんは集まって来る。「おはようございます。」「今日は遅いじゃないの」「途中でゆりの花をみつけたから罎りに取ろうと思って見てきたの」或いは「今日は天気が悪いね」「一日もつかね」「南の空があんなじゃ一日もつまみ」などという会話をしながら、おじさん、おばさんたちは発掘現場へと急ぐのである。朝の挨拶が終ればみんな手に道具を持ちそれぞれの仕事へと散っていく。しばらくすると調子の良い歌声が聞えてくる。おばさんの中には民謡を習っている人が何人かいて、調子の良い歌声を聞かせてくれる。時には一緒に歌い出す人もあれば、相づちを打つおばさんもある。発掘現場に調子の良い歌声が流れる。十時過ぎ、そろそろ一服の時間である。一服の時は出欠の点呼をとりますが、この点呼は、とても気持ちいいものです。こちらが元気な声で、〇〇さんと名前を呼べば「ハイ」と、歯切れの良い返事が返ってきます。点呼をとっている間、おばさんたちの話は弾んでいます。昨日帰ってから畑へ行って、さつまいもを掘ってきたから午後の一服に持ってくるとか、子供にお母さんは何の仕事をしているのかと聞かれて、宝さがしをしていると答えたと言っていたり、どこそこに旅行に行き、バスの中でずっとマイクを握って放さなかった、などと、話は弾んで二十分の休憩時間はあっという間に過ぎてしまいます。作業は、試し掘りの四角い穴を掘ることから始まり、石器の検出、住居址の発掘、また作業しやすいように草刈り、ポッカ(木の切れ端)かたしなどもします。楽しい作業ばかりとは限りません。半日などあっという間に経ってしまいます。午後も一服をはきみ、同じように作業は進められます。楽しい会話もまだまだ続きます。

縁談話なども出てきました。鎌やスコップの使い方がうまいことを見込まれたのか、息子の嫁にどうかなどという話がありました。この話とは別ですが、おかげさまで一昨年の暮れ、農家に嫁ぎました。やはり鎌の使い方がうまいことを見込まれたのでしょうか。私事で失礼致しました。

発掘の仕事はかなり厳しい仕事ですが、仕事の合い間に交わす、何気ない会話に「ほっ」と一息つくことができます。

和良比のおじさん、おばさん、ありがとうございます。
地引孝枝

おわりに

古い物へのあこがれや好奇心は、わたしたちに本来そなわっているものではないかと思えます。各地の博物館やデパートで開かれる考古資料の展示会はいつも盛況ですし、マスコミを通じて報道される文化財関係のニュースに関心をもっている方も多いでしょう。

しかし、さてと考えるのです。わたしたちは古い物のほんとうの価値を理解しているのでしょうか。ただ単に「古い」「珍しい」ことだけに感動しているだけではないのでしょうか。もしこのことで「考古学ブーム」が引き起されているとすれば大きな問題です。考古資料は、わたしたちの先祖たちによって、目的をもって作られたものです。今、わたしたちは、残された資料から彼らの意志をくみとることが必要なのではないのでしょうか。

こうしたことを理解していただくことが、わたしたち現場にたずさわる者の使命であり、そうした目的からこの本の作成を試みてみました。

H. K

昭和59年3月31日 千葉県四街道市教育委員会・社会教育課 発行

発行責任者・泉 重治 印刷・ナカムラ印刷

© The school board of Yotukaido-City.

